

『被災、石巻五十日。 霞ヶ関官僚による現地レポート』

皆川 治 著

食料・環境領域 専門スタッフ職 河崎 厚夫



『被災、石巻五十日。
霞ヶ関官僚による現地レポート』

著者／皆川 治
出版年／2011年12月
発行所／国書刊行会

篠原農林水産副大臣の秘書官を務めていた著者は、岳父の葬儀のため石巻市に出向いた翌日、納棺を済ませた直後に東日本大震災に見まわれ、被災者の一人となりました。その後、ようやく連絡がとれた篠原副大臣から「石巻市を手伝いながら現地情報を送るように。」との指示を受け、以来、約50日間にわたってレポートを送り続け「皆川レポート」として農林水産省内で情報共有されるとともに、地元選出の安住淳代議士を始めとする与党関係者にも貴重な情報として浸透していきました。

思えば、農林水産政策研究所の元所長でもある篠原副大臣は、過酷なミッションを秘書官に与えたものです。よそ者の被災者である著者は、わが子の食べ物を確保するだけでも相当な苦労があったはずですが、にも関わらず、克明な現地報告を毎日送り続けたのみならず、通常の行政ルートが寸断する中で中央の情報を最前線に伝えるパイパス役や様々なトラブルの収拾など連絡将校以上の役割をこなしたのです。これは、副大臣秘書官の肩書、市議会議長も務めた岳父の威光、さらに常に寄り添って荒れ果てた市内を道案内した奥さんの支えの賜ではありますが、彼自身の物おじしない性格とこれまでの経験、そして何よりも、物事を俯瞰的に見ることができ、観察力と判断力・構想力があってこそそのものだと思います。その結果、彼は、副大臣から与えられたミッションを見事にこなし、さらに、その副産物としてこの本を我々に与えてくれたのです。

この本は、その「皆川レポート」を時系列的に編集したものです。したがって、全体としての起承転結があるわけではありません。しかし、時間の経過とともに被災地そのものが変化していき、その変化が幾つかのストーリーとしても見て取れます。後に行くにしたがって、少しずつ明るい話題が出てくるのが救いではありますが、その悲惨さはやはり想像を絶するものです。

著者が最も心を痛め、当事者としても苦勞したのが、復旧対策の中心となるべき行政機関の連携の問題でした。まず3日目

の記録から既に国の出先機関同士の連携の悪さへの指摘が現れます。国からの食料支援が本格化する5日目からは、国・県・市・末端の避難所それぞれの連絡の悪さも顕在化してきます。その他にも、ガレキの処理を誰が主体的に行うのか？流れだした金庫等の保管の主体は？緊急に解決すべき問題が起きても、現場では市、国・県の出先の間で三すくみ状態が起きたり、国が示した指針が曖昧でかえって混乱を助長したり。果ては、避難所の設置や、遺体の搜索等々対策の根幹を成す様々な権限が3月11日に遡って県から市に事務委任されていたことを市長以下市役所の誰も知らなかったという事態まで起こってくるのです。

非常時には、通常時とは異なる関係機関の役割分担と意思決定機構が必要であり、行政以外のパワーも積極的に活用しなければならないことは阪神淡路大震災で十分に学んだはずではなかったか？しかし、誰も学んでいなかったことを、自らの体験をもとに明らかにしたのが本書です。

首都直下型地震の襲来が現実味を持って語られている現在、石巻で起こった様々な問題を東京で再現させないためにも、当事者と観察者という2つの視点を持つ筆者が記した厳しい実態を追体験し、「その時」どのように行動すべきかをそれぞれが考えておく必要があるのではないのでしょうか。